

2021年1月24日 礼拝説教要旨

詩編講解説教45 「もっと愛の言葉を」

詩編45：11～18、Iヨハネ4：7～10

宗教改革者のマルチン・ルターは、大学で詩編第45編の講解講義をしております。ご存知のようにルターは宗教改革の激しい戦いの中にありました。この45編の講義がなされたのは1532年頃と言われていますが、この頃も改革の真っ只中であることに変わりありません。またその頃ルターは続けて両親を亡くしております。さらにその数年前からドイツではペストの流行がありました。ルター自身も健康を害していたと伝えられています。この45編を講解講義した理由についてルターは次のように述べております。「わたしたちは何か喜ばしい気持ちで教えたり、聴聞したいのです。そこで詩編45編をわたしは取り上げました」と。改革の只中にあり、また健康を害したり、暗い日々を過ごしていた中で、ルターはこの詩編をどうしても読みたくなりました。その心境は皆さんもわかるのではないのでしょうか。無性に喜びの御言葉を聞きたくなる。愛の言葉を聞きたくなることがあります。そこで慰められ癒される経験があるのです。

「心に湧き出る美しい言葉、わたしの作る詩を、王の前に歌おう」（2節）愛を語ること、それは心から美しい言葉が湧き出ることです。けれどもわたしたちの言葉はどういう言葉でしょうか。毎日の生活のことだったり、仕事のことだったり、健康の話、お金の話、時に誰かの悪口であったり、愚痴や不満であったり、たわいのない冗談や世間話に溢れているのではないのでしょうか。最近ならコロナのことでしょうか。口をひらけばコロナコロナ。そういう言葉しか出てこないならば、わたしたちの心もまたそういうものに支配されているということでしょう。それは決して健やかとは言えないのです。わたしたちの心から美しい愛の言葉が湧き出るようになるためにはどうすればいいのでしょうか。

今日は45編の後半部分、11節以下のところを読みます。この詩編は婚礼の歌と言われていますが、この11～13節は特に花嫁に向けて語られている言葉であります。古来より教会はこの詩編について、キリストを花婿、教会を花嫁として解釈してきました。ですからこの11節以下は花嫁である教会、つまりわたしたちが聞くべき言葉として読むことができます。カルヴァンはこの詩人をダビデの息子ソロモンとしていますが、ソロモンはエジプトから妻を迎えました。それゆえに「あなたの民とあなたの父の家を忘れよ」（11節）とあります。異邦人の妻がその国と父の家を捨てて夫の元に来る。このことはこれまでの生き方の転換、決別を意味しています。

実際、結婚するという事は、これまでの生き方をだいぶ変えないといけません。これまで一人気ままに暮らしてきた。あるいは家族と一緒に暮らしてきた。それをそのまま結婚生活の中に持ち込んだら、おそらくすぐにも結婚生活は破綻してしまうでしょう。相手がいることです。相手に合わせていく。相手を変えるというよりは自分をまず変える。愛するのはそれができるのです。先日テレビを見ておりましたら結婚するために一定期間お試しをする事業が紹介されていました。一緒に生活してみても合うか合わないか試してみても決めるそうです。そうしましたら隣でそれを見ていた妻がすぐに「結婚してから合わせていくのよ！」と言いました。合うか合わないか。それは相性ということでしょうけれども、それは言ってみれば合わないに決まっているのです。でも結婚してお互いが相手を気遣う中で合わせていく。

そうやって夫婦になっていくのです。

キリストと教会、キリストとわたしたちの関係もそうでしょう。わたしたちがキリスト者になるというのは、言わばキリストと結婚することです。キリストとわたしたちが合うのかと言えば、初めから合わないに決まっているのです。罪があるからです。だからこそわたしたちはこれまでの自分と決別していかなくてはなりません。洗礼を受けるというのはそういうことです。パウロは次のように言います。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」(ローマ12:2) これまでの生き方を持ち込んではいけません。心を新たにしておいて自分を変えていただくこと。仕方なくではなく喜んでそれができるようになる。それが神さまを愛することです。

でもそれはわたしたちが神さまを愛するというより、むしろ神さまから愛されているからこそ可能なことなのでしょう。自分のために神さまが何をしてくださったのか。そのことを知ればわたしたちは喜んで自分を変えることができるのではないのでしょうか。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(1ヨハネ4:10) 神さまはわたしたちを愛するがゆえにご自身が真の人となられ、最後は十字架で死んでくださいました。神さま自らがその愛のゆえにそこまでわたしたちに合わせられたのです。そのようにして本来神の家に入るに値しないわたしたちを花嫁として迎え入れてくださるのです。

その花嫁の姿が14節以下です。「王妃は栄光に輝き、進み入る。晴れ着は金糸の織り、色糸の縫い取り。彼女は王のもとに導かれて行く」(14~15節) この金の晴れ着こそイエス・キリストでなくて何でしょう。パウロも「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ている」(ガラテヤ3:27) と述べています。わたしたちはそのようにキリストという晴れ着を着せていただき、御前に立つことができるのです。そのように晴れ着まで用意していただき、わたしたちを花嫁として迎えてくださる。わたしたちはこの神さまの愛にどう応えていけばよいのでしょうか。

「わたしはあなたの名を代々に語り伝えよう。諸国の民は世々限りなく、あなたに感謝をささげるであろう」(18節) わたしたちはこの神さまの愛を伝えていくのです。神さまの愛の言葉を語るのです。それは無理矢理に心にも思っていないことを言うものではありません。わたしたちの心の中にはすでに神さまの愛がキリストによって豊かに注がれています。愛の言葉であるキリストをわたしたちは着ているのです。そのことを信じて、これまで以上に愛のある言葉を、相手を労わり、思いやる言葉を語りましょう。